



歴史に寄り道

石州瓦

【島根県大田市・江津市・浜田市・益田市】



益田市にある島根県芸術文化センター「グラントワ」。屋根ばかりか外壁までもが赤い瓦で覆われている。使用された石州瓦は約28万枚。



左が量産タイプの石州瓦。右が昔ながらの製法で焼かれた石州瓦。



2007年、世界遺産（文化遺産・産業遺産）に登録された石見銀山。銀山経営の拠点として整備された大森の街並みもまた赤い瓦で彩られている。



古くからの製法にこだわって生産される石州瓦の工場。（撮影協力／亀谷窯業有限会社）



ハイテク技術を駆使して生産される現代の石州瓦の工場。（撮影協力／株式会社丸惣）



「はんど」と呼ばれる水瓶。江戸時代から明治・大正・昭和にかけて全国で愛用された超ロングセラー商品だ。

今回はこの辺りで寄り道



大田市から西へ江津市、浜田市、益田市と続く島根県西部エリアはかつての石見国で、「石州」はその別称である。この地方を旅していると、家々の屋根が赤い瓦で彩られていることに気づく。家だけでなく、学校や役所、警察署、駅舎などの公共施設にも赤い瓦が施されている。この赤い瓦が「石州瓦」である。石見は窯業の盛んな土地柄で、中でも「はんど」と呼ばれる石見焼の水瓶は凍てに強く、漬物などの貯蔵用として北前船に積まれて全国各地に出荷された。石見焼の特性は、今から二百万年前に堆積してできた都野津層の粘土に由来する。都野津陶土は耐火度が高く、千二百度を超える高温で焼き上げることで陶器としての強さが引き出される。

石見焼から派生して、江戸時代後期からつくられるようになったのが今に続く石州瓦である。石州瓦独特の赤い色と強さを生み出しているポイントが陶土のほかにもう一つある。島根県東部、出雲地方の来待町で採掘される来待石を原料とする釉薬だ。この来待釉薬が、石州瓦に画期的な技術革新をもたらした。

石州瓦は千二百度を超える高温で焼くことで耐圧の高い瓦となる。その曲げ破壊強度はJIS規格の約二倍。表面を指で弾いてみると「ギーン」と金属的な高い音がする。堅く焼き締まり、小さな空洞が絶妙なバランスで瓦内部を構成しているからだ。

瓦の吸水率は凍害を防ぐバロメーターとなる。吸水率が高い瓦は多くの水を吸い、低温でその水が凍ると体積膨張して瓦を破壊する。JIS規格の吸水率が十二パーセント以下であるのに対して、石州瓦の平均は四・八八パーセント。凍害に強い瓦として全国でシェアを広げる大きな要因となった。

かつては全国各地で瓦の生産が行われていたが、現在の瓦産業は寡占化が進み、石見、三河、淡路の三大産地の生産量が八割以上を占める。そのうち石州瓦のシェアは全国2位。平成十九年には地域ブランド認定を受けている。

（取材協力／石州瓦工業組合）